本書は，主としてラマ5世の時代までを取扱い，上のような時代区分に従って，それぞれの時代の租税の形態，税収額，税務行政の仕組み，租税政策などを取上げて記述しているのである。　（清永敬次）

The Dynastic Chronicles, Bangkok Era, the Fourth Reign, B. E. 2394～2411 (A. D. 1851～1868). Translated by Chadin (Kanjanavanit) Flood. Volume One: Text. Tokyo: The Centre for East Asian Cultural Studies, 1965. xvi＋267p.

まことに不思議なことなのだが，タイ国史研究の現状を見ると，史料のきわめて限られているスコータイ史や，アユタヤ史の研究より，かえって史料の豊富なラタナコーシン史，とくに1932年の立憲革命以前の歴史研究の方が手薄である。この点 W. Vella の「ラーマ3世史」などは，この方面でのパイオニアワークとして大いに高く評価されるべきであろう。

さてラタナコーシン史研究者がまずよるべき「正史」といえば，Chaophraya Thiphakorawong の *Phraratcha Phongsawadan Krung Ratanakosin* を挙げるべきであろう（この年代記については『東南アジア研究』第2巻第2号所収拙稿参照）。上記の Vella もこれを縦横に引用している。本書はこれまで意外な程利用されることのすくなかったこの貴重な年代記の内，「ラーマ4世」の部の前半の完訳である。何はともあれ，本邦はおろか世界初訳という業績が，わが国の研究機関の手で生み出されたことを喜びたい。と同時にこの困難な企画をとりあげ，これを完成へと導いた東アジア文化センター関係者の識見と努力とに対し，心からなる敬意を表するものである。

本訳書は，「ラーマ4世年代記」のうち仏歴2404年（1861），Yinyaowalak 内親王の前髪を断つ儀式の記事までを含み，原著の約半分（245ページまで）に相当する。固有名詞のローマ字表記は Mary Haas 式の音素記号をもって行なわれ，声調まで厳密に表記し分けている。

この種の文献の翻訳につきまとう困難のひとつは，政府機関ないし役職名に対する訳語選択の問題である。本訳者は原語直訳主義をとり，どうしても適当な訳語の見出せないときは，原語をそのまま残すという慎重な態度をとっている。タイ語の昔の官庁名または役職名には名称と機能の一致しないものがまま見受けられるので，この訳本のみをたよりとする一般読者にとって，直訳主義はあるいは misleading となるおそれなしとしないが，この点は，続刊予定の第3巻：註解の中で解決されるものと信ずる。

訳者はタイ人で，チュラロンコン大学文学部を首席で卒業後，ワシントン大学に学び，東南アジア史を専攻して修士号を獲た新進の歴史学徒であるが，本訳書の完成には，タイ語と共に，日本語，中国語をよくする歴史学者の夫君（米人）の協力があずかって力あったと聞いている。全3巻の完成を心より期待したい。

（石井米雄）

Thawi Mukthorakosa. *Phramaha Thiraratchachao.* Bangkok: Phrae Phitthaya, 1963. ix＋844p.

タイ国近代史のなかにプラモンクットクラウ王，すなわちラーマ6世をどう位置づけるかは，政治史学者にとって焦眉の課題となっている。たとえば1932年の立憲革命の素因のおおかたは，ラーマ6世の統治のなかに求められねばならない。とにかく，毀誉褒貶の激しい人物で，従来，この国王の評価は，タイ国内外で，はっきり2つにわかれている。

そのわりに，ラーマ6世の統治についての実証的研究は，殆んどなされず，その御代に生じた事柄を明確にしかもまんべんなく捉えることは，これまでかなり困難であった。国王の特に後半世における「乱行」が世に知られることを怖れてか，ラーマ6世についての一次資料の一部は公開されないともいわれている。それに，国王の統治した時代がまだあまりに近すぎるこある。それらの理由から，ラーマ6世の研究は，ある種の困難さに伴われているのだ。

本書は，そのラーマ6世に真っ向うから取り組んだすぐれた伝記である。ラーマ6世に関する基礎文献をひととおりおさえ，それをさらに，同時代に生きた人々の面接で補っている点，きわめて実証的である。その点で，本書は，あまたのメリットをもっている。なによりも感心することは，ラーマ6世の一生が，きわめて淡々と，しかも広く詳しくカバーされている点である。著者が，そもそものアプローチにおいて，ラー

マ6世を多面的な人間と捉え，王の多面性を疎漏なく捉えようと努力したことが，幸いしているように思われる。更に本書は，当時生じたいくつかの重要な歴史的事象を明確に解き明かしている点で，貴重な文献になっている。タイの王朝で，はじめて外国留学の経験をもった国王であり，しかもその留学期における王のsocializationが，タイ政治史の上で一つの重要な転変の契機となっているだけに，本書の冒頭の留学についての叙述は，たいへん参考になる。そのほか，1912年に生じたいわゆる「ラタナコーシン歴130年の革命」についての記述は，その革命が，たとえ失敗したとはいえ，タイの絶対王制にたいする近代官僚の最初の革命的反逆であっただけに，貴重なデータを提供してくれているし，また有名な「スアパー義勇隊」について，国王がどういう考えをもっていたかも，本書でよく示されている。

ラーマ6世にたいする著者の態度は，タイトル――「哲人王」を意味する――が示すようにたいへん好意的である。ラーマ6世の御代は，本書においては，チャクリ王朝史の黄金時代と捉えられている。ラーマ6世が犯したさまざまの失政は，本書ではかならずしもはっきりしない。その点は，Chula Chakrabongs らの英語文献，あるいは Thai Noi らによるタイ語の伝記によって補足する必要があろう。それにも拘らず，本書は，現段階におけるラーマ6世の研究としては，最先端を切るものであり，内容の水準も高度であるからには，見逃せない一書であると断じうる。巻末にまとめられた参考文献目録は有益だし，そして，本書は，巻末に索引を備えている点で，タイの本としては，稀有の範疇に属するといえる。　（矢野　暢）

Chalao Chaiyaratana. *Let's Speak Thai.* Bangkok: The Social Science Association Press of Thailand, 1965. 188p.

本書は，タイ人の言語学者によって書かれた，外国人（主として英語を母国語とする）のための，タイ語入門書である。題名から察せられる様に，実用一点ばりの練習用の書物であるが，その基礎は，現代アメリカの構造言語学にもとずいて作られた，まじめな本である。タイ語について，タイ人の言語学者によって書かれた実用的な練習用の本では，本書が最初のものではないかと思う。

著者は，MIT においてApplied Linguistics で Ph. D. を取り，現在タマサート大学教養学部言語学科の Head をつとめると同時に，自身の Chalao Language Institute においても，活ばつに言語教育を進めている。タイ国における，この分野での代表的人物と言えるだろう。本書の他にも，タイ人のための英語のテキスト類やレコードなど，数多く出版している。タマサート大学では，英語，フランス語，ドイツ語，中国語，日本語が教えられているが，どの授業も著者流の Intensive Method でつらぬかれている様である。

本書の全部が文型及び句構造の練習より成る。全体で32の文型を設定し，その各々を一つのChapterとして多数の例をあげて練習に供すると同時に，句構造として，Noun Phrases と Verb Phrases とを説明し，その各々の型につき練習用の例をあげる。これらの文型及び句構造を一見すると，本書は Transformational Analysis の理論を基礎としていることがわかる。Noam Chomsky を中心としてアメリカで展開された Transformation の理論は，色々な面でその有用性を発揮しているが，これはその理論がタイ語に応用された好例であろう。なお，本書では，タイ文字はいっさい使用せず，すべてローマ字による音素表記が用いられており，根本的には Mary Haas の *Spoken Thai* の表記法と同じものとみてよい。

本書は，もともと，教室で使用する Text として作られたもので，独習用のものではないから，別にこん切ていねいな説明というものはない。したがって，本書でタイ語を学習する際には，少くとも最初の一定期間は，適当なタイ人について勉強する必要があるだろう。ただ，最初のコツを得てしまえば，あとは何も考えずに自分でどんどん進むことが出来るだろう。本書を完全に仕上げれば，一応の Speaking には不自由しないと思う。最後に，問題に思う点は，これを Text に使用した場合，習う方の者に相当な忍耐力がなければ，最後まで続かずに落伍する者が多く出るのではないかと言うことである。全体が文型という文法的な Pattern のみにもとずいて配列されているため，各文の内容の間には何のつながりもなく，ただ同じPatternに属する多くの文を次々と練習して行くのであるから，どうしても，「アキが来る」きらいがあるだろう。私は，むしろ，本書は教師用の整理ノートの様なものと